



婦人と子ども

第五卷第八號

小さい別嬪さん (つぎ)

おきな

一目見て慄へ上ったのも道理、
出て来たものは、見るから恐ろ
しい妖怪の様な大きな怪物でし
た。

「何といふ恩知らずだらう。折

角己の御殿へ入れて生命を助けてやった恩も思はずに、何よりも大事にして居る薔薇を盗むとは何事だ、さあ、其罰には、今半時間もとよぬ中に貴様の生命を取ってやるから、そう思へ」

ろ　しい聲で、この妖獸が怒鳴りだしました。

お父さんは丸で氣も心も顛倒して仕舞って、ぼったりと其怪獸の脚下に平伏して

「お慈悲に、生命ばかりはお助けを願ひます、實は、家を出まする時分、一人の娘の折角頼みがありましたもんですから、つい何知らずこの薔薇を取りました譯で、決して惡氣ではござりませぬから、殿様、どうかお宥免を願ひます

といふと、怪獸は

「已おれは殿様とらじゃ
ない、こゝに棲すま
んでる怪獸けたもなん
だよ、そんな甘うま
いお世辭せじをいっ
たつて、其その煽動おだて
には乗のらないよ。
所で今聞きけばお
前まへの家うちには娘むすめが
居ゐるといつたね、
そんなに生命いのちが



惜おしいのなら、
其その娘むすめの中誰たれか一ひと
人お前まへの身代みしろは
りとしてこゝに
贈たませば、夫それでお
前まへの生命いのち丈だけは
助たすけてやらう、
夫それが出來できなかつ
たなら、三月みつきた
つてから、お前まへ
自分でこゝへ殺ころ

されに來ねばならぬ、夫を確と約束すれば、此場丈けは見逃してやる」

もとよりお父さんは、可愛い娘を自分の身代りとして殺されによこす氣はありませんが、兎に角今約束して置けばも一度家に歸つて、娘どもの顔も見られるからといふので、思ひ切つて、その事を約束しました。すると、怪獸は又何處へとなく行つて仕舞いました。

夫から、お父さんは大急ぎで支度してこの恐ろしいお城を後に見て、馬を急がせて山道を出て参りました。が、やがて、何時間かかゝつて、とうくお家へ歸りました。

所が、待ち兼ねて居た三人の娘さん達は、大喜びで奥から駈つて

出て三方から、お父さんにすがりついて来ました、併しお父さんは、娘等の顔を見る勇氣もない位、胸ははりさける様、目には涙が一杯たまって居ます。娘さん達はこの有様を見て、どうした事かと心配と不思議とでお父さんのお顔を見つめて居ます、やがてお父さんは

「あゝお氣の毒だが、姉さん達にはお土産が出来なかつたよ」といって、船が都合よく行かなかつた事を咄して、そして彼の蓋を藪を取り出して、

「さあ嬢別さん、これがお前のお土産だ、然し、このお土産、お父さんに取ってどれ丈け高い代價に付いてるか知れないんだよ」といって、彼の怪獸のお城でのお話を残らずして聞かせました。

其話を聞いて二人の姉さん達は、はらくと涙を流して、これといふのも、妹嬢が、つまらない薔薇なんかを注文したからで、其爲めに、お父さんが殺されるといふ事になったんだ、といって、ひどく妹を攻撃して、

「夫にまあ御覽よ、自分の故で、お父さんにこんな難儀をかけて置きながら、涙一滴もこぼさないんだもの、何といふ親不孝なんでせう」

といつて居ますと、妹は、

「いーえ、姉さん御心配下さらなくても宜いのですよ、私はもう、ちゃんと決心して居ます、怪獣は、吾々の中の一人を身代りによこせば、お父さんの生命を助けてやるといったといふじゃありません

せんか、だから、私は今から直いって、お父さんの身代りに立つ積りなんですよ

判然といつたなり涙一滴もこぼしません。お父さんは、これを聞いて

「いや、それは不可ないよ、私はどうしても、年の若いお前方を殺させることはしない、私こそもう年考って、この前何程も生きて居れないんだから、なあに、四五年も早く死ぬ積りで、殺されに行かうよ、どうして、可愛相に、お前方をやれるものか
「いーえお父さん 卿若し其處へおいでになりや、私屹度後からついて行きますわ、私年が行ってないたって、生命なんか、もう要らないんですもの、其上、お父さんが死なつた悲歎の爲め

に死ぬよりか、いっそ一思ひに殺される方がどの位樂か知れない
 んですもの

お父さんは、いろく言葉を盡して言つて聞かせましたが、小さい
 い別嬪さんは、どこまでも強情はつて聞きません、處で、二人の
 姉さん達は、心の中では結局喜んで居ります、つねく妹が皆か
 ら可愛がられて居るのを嫉んで居ますので、

夫でお父さんもうくお仕舞には我を折つて、妹娘の言ふこと
 を聞き入れることになつて、そこで妹は、お父さんの身代はりに
 たつて、お城へ行くことに決りました。

待ては僅一日でも一年の様に長く思れるけれども、こんな時には
 月日は譯もなく早いもので、其中にもう約束の三月が経つて仕舞

ひました。それで、是非なく仕度をしてお父さんは妹娘をつれて、お城へ出かけることになりました。いよく出立といふ日になりますと、憎いじゃありませんか、姉さん達は、兩方の目からしをすりこんで、夫で無理に涙を出して、おいくと聲許り眞實に出して泣いて居ます。しかし、妹娘は決して泣いては居ないで

「夫では姉さん御機嫌よう」

と立派にお違乞をして、家を出ました。

やがて何時間かかゝって、とうく彼の怪獸のお城へ着きました。お父さんは、丸で地獄に這入る様な心地で、娘の手をひきながら、勝手を知って居ますから、ずんく廊下を通って、大廣間に這入りますと、此處には、ちゃんと、二人前の御膳の用意が出来て居

ります。併しお父さんはもう、胸が一杯で、何も食べる氣にもなれません、別嬪さんも悲しいには違ありませんが、態と夫を隠して何事もはきくとやっつけて、反ってお父さんを勞はって助けて居ます、そして、平氣で御膳に向ひますと、さまざまの御馳走やお料理が出て居りますから、心の中では、

「これは私を食べる前に、十分私の身體を肥やして置かうといふ怪獸の考と見える

と今更の様に恐ろしくは思ひながらも、遠慮なしに十分御馳走になつて居ます。其中に食事が濟みますと、何か知らん奥の方で非常な物音がしました、これは彼の怪獸の出て來た音でありますから、お父さんは、涙ながらに娘に違乞をして、この室を出て歸つ

て行きますと、憫な娘はたった一人、この廣い寂しいお座敷に取り残されました。暫らくすると、どしんと大きな足音がしてこのお座敷に這入って来たのが、彼の怪しげな獣でありました。娘は其恐ろしい姿を一目見た丈で、氣を失ひ相になりましたが、もとから氣丈夫な性質ですから、ちーっと心を沈着けて、態と恐ろしさを隠して居ますと、怪獸は、のっさくと娘の方へ大股に歩いて寄って来ました。

(つゞく)